

二〇三三年一月二七日

背な丸め銭湯までの懐手
紙飛行機着陸したる雪間かな
氷瀑の時を止めたる静けさよ
笠被る狸も軒へ雪の朝

澄子
うつき
素秀
みきえ

二〇三三年一月二六日

おはやうと雪投げかへす教師かな
降り積もる雪の嵩見る鼻眼鏡
野地蔵の福耳に垂る氷柱かな
校門に彼と彼女の雪だるま
畏まる小さき足裏雛の客

ひのと
よう子
素秀
かかし
みきお

二〇三三年一月二五日

梅ヶ枝に触るれば弾く力あり
一と筋の轍も見えず銀世界
三日月の顎の尖りて凍てにけり
一夜にて町白変す寒波かな
雪だるま落ちるし目玉戻しけり
眠る山吐くは柚家の煙かな

たか子
やよい
素秀
満天
かえる
あひる

二〇三三年一月二四日

母看取る日々や盆梅一花咲く
耕人の運転席に握り飯
白骨樹映る池塘に風冴ゆる
這ひ登る怪獣のごと地吹雪す
転校のだちへ無言の雪つぶて
毛糸帽目深にかぶり待ち合はす

わかば
素秀
和子
あひる
ひのと
かえる

二〇三三年一月二三日

検査着の固き折り目や椅子寒し
街灯に透ける氷柱はシャンデリア
出来ること今日のうちにと冬耕す
綺羅の水脈沖一文字春隣
野地蔵の雪を払うてゆく子かな
切岸に尖る丈余の氷柱かな

なつき
うつき
こすもす
わかば
ひのと
愛正

二〇三三年一月二二日

水揚げや修羅場のごとく鰯跳ねて
寒紅を引きてリモート句会かな
炊き立てのご飯窪ませ寒卵
薬膳の本など買うて寒に耐ふ

宏虎
よし子
うつき
たか子

二〇三三年一月二二日

鍬洗ふ縄のほつれや水温む
水鳥の一羽潜ればつぎつぎと
逆立ちのわざ競ふやに鴨潜る
白息を行き渡らせて眼鏡拭く

みきお
きよえ
せいじ
ひのと

毎日句会みぬる選・二〇三三年一月二九日